

地域イベントを用いた地域づくりについての研究

～高知市よこせと地域を対象として～

1200443 佐々木 莉子

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. はじめに

1.1. 概要

本研究では、高知県高知市の南部に位置する横浜小学校の小学校区を指し、横浜地域・瀬戸地域を合わせた「よこせと地域」を対象として、地域イベントを用いた地域づくりが地域に与えた影響を明らかにした。その結果、よこせと地域での地域イベントは、当初行政主導であったが、住民主体型のイベントづくりへと変化し、それに伴いより柔軟なアイデアを生かした多様なイベントが開催されるようになった。地域づくりに地域イベントを用いることにより、地域住民に受け入れられる身近な地域づくりが実現され、新たな人の流れを創出、地域住民同士の日常的なコミュニケーションが生まれるなど、地域に好影響を与えている。

しかし、よこせと地域の防災や福祉分野、地域イベントを含めた地域全体の情報発信が不十分であることや、地域づくりの主体となる人が固定化してしまっていることから地域づくりに参加していない住民の当事者意識が希薄になっていること、また地域イベントのマンネリ化が進んでいるといった現状が見えてきた。

その対策として、地域の小・中学生からのアイデアを地域イベント、地域づくりに取り入れることにより、マンネリを解消、ホームページやSNS等による情報発信を活発化させ、住民に当事者意識を持たせることで、地域と住民が関わり合いながら地域全体で成長を続けていく、新たな地域づくりが求められていると考える。

1.2. 背景

近年、地方では先行して少子高齢化・人口減少が進み、地域内交流の減少や地域の衰退が見られる。また、それを受け、全国各地域再生に向けた施策が講じられている。その手法の一つとし

て、地域に関連したイベントの開催があげられる。地域イベントの開催は、地域に関わりのない人がその地域のことを知り、足を運びきっかけを生むとともに、イベントを通じた地域内のコミュニティ形成が促進され、それが地域の魅力度向上に繋がるとともに、地域住民の地域に対するアイデンティティの形成にも寄与していると考えられる。このことから、多くの地域で地域イベントが地域づくりに取り入れられている。

しかし、中西（2005）によれば、補助金頼り・行政主体の要素がある地域イベントは存続が難しいということも明らかにされている。また、一般的にイベントは“一発屋”的な側面が多々みられ、担当者が移動するとそのイベントも消滅してしまうことに繋がり、地域はイベントに振り回されてしまう。さらに、イベントを継続して実施していくと、イベントにか関わっている方々に意識の温度差が生じ、それが地域内の人間関係に発展してしまう事例も見られる。このように、イベントを実施していくと地域に何らかの影響が生じてしまう。

そこで、地域イベントを地域活性化のパーツに適用する場合、イベントが地域に与える影響を検討する必要があるとともに、地域と共存したイベントの内容や実施手法を明らかにすることが求められる。

1.3. 目的

地域イベントを用いた地域づくりを推進している「高知市よこせと地域」を対象としてヒアリング調査を行い、地域イベントが地域にどのような影響を与えたのかを明らかにする。ヒアリング結果より、地域イベントを用いた地域づくりについて、今後の課題と対策を提案する。

1.4. 研究方法

本研究は、はじめに「地域づくり」や「地域イベント」に関する既往文献をもとに検討する。

次に、高知市よこせと地域の地域イベントを取りまとめている「よこせと連携協議会」の会員の方、高知市の行政として地域づくり、よこせと地域の地域イベントにも当初より携わっている「高知市地域コミュニティ推進課」の方へヒアリング調査を行う。

それらをふまえた上で、よこせと地域の地域イベントを用いた地域づくりが地域に与えた影響とその現状を明らかにする。そこからよこせと地域の地域イベントを用いた地域づくりにおける課題を整理し、地域イベントを用いた地域づくりをより発展させていくための方法について提案する。

1.5. 地域づくりの定義

石井・霜浦（2018）によれば、地域づくりとは、不満や課題を解決する課題解決ではなく、主体形成である。主体形成とは、地域のことをよく知り、それを多くの人と共有することにより、対話を重ねる仲間を“つくり直す”ことである。“つくり直す”という表現には、仲間の意味がこれまでとは異なり、対話を重ねる仲間であることが含まれている。

そこで、本論では、地域づくりを「主体形成＝対話を重ねる仲間づくり」を達成することと定義した。

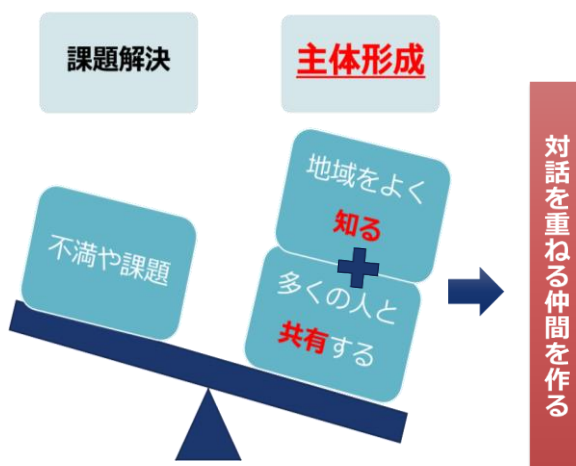


図1 地域づくりの定義

2. よこせと地域の概要

今回研究の対象とする、よこせと地域は、地域コミュニティ計画で定められた、高知市南部に位置する高知市横浜地区・瀬戸地区を合わせた高知市立横浜小学校の学校区を指す「よこせと地域

（横浜瀬戸地域）」である。浦戸湾と鷲尾山などの南嶺に囲まれた自然あふれる住宅地域であり、以前は海辺のにぎわい市の会場として用いられている瀬戸港で自由な売買が盛んに行われる漁業の町としても有名であった。

平成30年4月1日時点で、よこせと地域には約8000人が暮らしている。平成8年からの人口推移を見てみると、地域コミュニティ計画が策定された平成9年の約8900人から、人口は約900人減少している。人口構成比を見てみると65歳以上の高齢者の割合が増加する一方で、15～64歳の生産年齢人口に当たる世代の割合は減少しているが、0～14歳の年少人口の割合はほぼ横ばいで変わっていない。また、世帯数は集計を始めた平成14年から平成30年までほぼ横ばいで変わっていないことから、単身世帯の増加が伺え、地域住民同士のつながりの希薄化が危惧されている。



図2 よこせと地域の地図

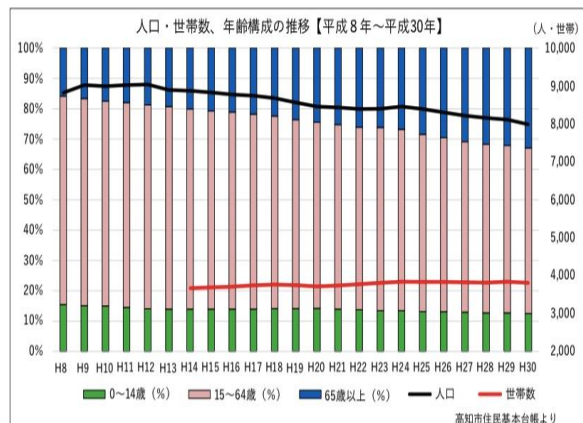


図3 よこせと地域の人口推移 (高知市住民基本台帳より出典)

3. よこせと連携協議会の活動内容

3.1. ヒアリング調査概要

(1) 目的 よこせと地域における地域イベントを用いた地域づくりの現状を明らかにする

(2) 日時 2018年12月18日、2019年11月30日、12月5日の計3回。

(3) ヒアリング対象

- ・よこせと市民会議事務局長 岡田 法生さん
- ・よこせと連携協議会会長 江口 富博さん
- ・よこせと連携協議会活性化部会長 林 静さん
- ・よこはま体育会会長、よこせと連携協議会 丸岡 圭郎さん
- ・高知市地域コミュニティ推進課

(4) ヒアリング項目 (一部抜粋)

- ①よこせと地域の良い所と課題
- ②地域イベントを長年継続して開催することによって感じる、よこせと地域の変化
- ③地域づくりに携わるようになったきっかけ
- ④理想的な地域イベント・地域のあり方

3.2. よこせと連携協議会の取り組み

表1 よこせと連携協議会の来歴

H6年10月	「横浜瀬戸コミュニティ計画策定市民会議」設立
H8年	「横浜瀬戸コミュニティ計画推進市民会議」結成
H9年3月	「横浜瀬戸コミュニティ計画」策定
H15年	「よこせと・まちづくり市民会議」へ名称変更
H27年7月	「よこせと連携協議会」設立
H30年8月	「よこせとコミュニティ計画」策定

よこせと連携協議会は、現在、よこせと地域で地域づくりを行う団体である。始まりは、高知市の行政が作った地域づくりの指針である「横浜瀬戸コミュニティ計画」の策定時に結成された「横浜瀬戸コミュニティ計画推進市民会議」という団体である。平成15年に「よこせと・まちづくり市民会議」に名称変更されたこ

の団体は、元々事務局に高知市地域コミュニティ推進課が置かれ、行政が管理する行政主導の団体であった。しかし、平成27年、団体の管理を高知市から地域団体へと移管し、住民主導の「よこせと連携協議会」として再出発している。本団体の会長には、前団体の代表でもあった江口富博さんが着任している。設置目的を「住民同士の相互の親睦、交流を深めると共に、地域で共有する課題の解決を図ることにより、元気で笑顔あふれるまちづくりを目指す」と策定した。

所属団体には、体育会・横浜小中学校・横浜小学校PTA・よこせと防災連合会・横浜保育園・地元企業・など、地域の様々な団体が所属している。各団体は、イベントへの参加に加え、お酒を酌み交わす親睦会を通じ、地域の活動だけでなく深いつながりが出来ており、地域活動以外の困り事が起こった時にも、助け合う関係性を築いている。

よこせと連携協議会では、取り組むテーマごとに安心安全部会、福祉部会、子供部会、活性化部会の4つの部会に分け活動を行なっている。(図4)

安心安全部会では、防災と道路・交通の2つのテーマを扱っている。防災分野では、防災学習会を開催し、地震や土砂災害危険箇所の周知に取り組んでいる。また、地域子ども達で“カチカチキッズ”を結成し、災害に対する呼びかけや火の用心の見回りを行なっている。道路・交通分野では、交通面での危険箇所を調査し、関係機関への改善を促す活動を通じた道路環境の改善に向けた取り組みや、通学路の見守り、ヘルメット着用を推奨し、交通安全の意識啓発に取り組んでいる。

福祉部会では、つながりを見守り、交流の2つのテーマに分けて扱う。見守りの分野では、住み慣れた地域で安心して暮らせる環境づくりを目指し、地域で困っている人(例：買い物弱者となった高齢者)を抽出し、「支え合いマップ」を作成、向こう三軒両隣を意識した支え合う関係づくりの強化に取り組む。交流の分野では、子どもから高齢者まで交流できる居場所づくりとして、昔遊びや夏休みラジオ体操等のレクリエーションを実施している。

子ども部会では、子育てしやすい環境づくりを遊び場、体験の2つのテーマに分けて扱う。遊び場の分野では、子どもたちが会議を行い、公園に対する意見を出した上で、子どもたちの遊び場に

ついて、どのように整備していくかを検討している。体験の分野では、万華鏡教室やニロギ釣り、清掃活動を通し、スポーツ、文化、植物、天文、料理など様々なテーマで、保育園・小学校・中学校の垣根を超え、子どもたちが積極的に体験を通して文化的活動に関わることができる環境を作っている。

活性化部会では、自然・環境、にぎわい、活性化、若い世代の活躍の4つのテーマを扱っている。自然・環境分野では、よこせと地域の自然を生かした南嶺ハイキングやニロギ釣り、清掃活動を通し、自然を守りながら楽しむ取り組みを実施している。にぎわい分野では、お祭りや夏祭りなど多くの地域イベントの開催に取り組んでいる。準備段階から、地域の人と協力して一緒に汗をかき、交流を深め地域の仲間づくりに貢献している。また、よさこいの演舞場、競演場の設置の要望が住民から上がっていることを受け、にぎわい分野では、検討、協議を進めており、地域だけでなくお客様にも楽しんでもらえる取り組みを常に考えている。活性化分野では、“よこはまカルタ”や“歴史探訪まちあるき冊子”、“旅行雑誌横浜版”を作成、地域内外によこせと地域の魅力を紹介する取り組みを行なっている。また、空き家を利用した移住・定住の取り組みにも取り組む。若い世代の活躍の分野では、地域活動に「若い」も「ベテラン」も関係ない！と、PTAや地元企業、大学生と連携して若い世代が活躍できる仕組みを作り、地域のリーダーを育成する取り組みに力を入れている。

よこせと・まちづくり市民会議時代には一本化して行っていた多岐にわたる地域での活動を、4部会制にして分けることで、負担が集中することを防ぎ、地域づくりで懸念されることの多い次世代への引き継ぎを行いやすい体制を実現させている。よこせと連携協議会は、地域住民主体の団体であるが、地域イベントや交流のみならず、移住・定住や福祉分野における取り組みも強化しており、地域課題を地域全体で考え、支え合う体制が整っており、他の地域には見られない特徴であると言えるだろう。

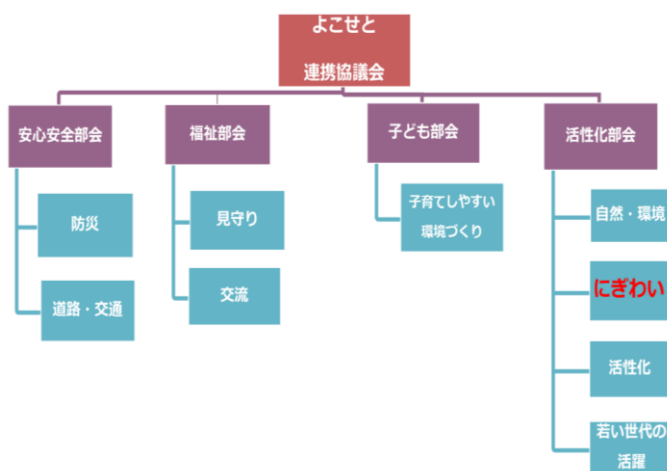


図4 よこせと連携協議会 体系図

表2 平成27年活動実績

4月	総会・歓送迎会 『よこせとまちづくりニュース』発行
5月	よこせと海辺のにぎわい市開催
6月	ロードボランティア
7月	新町ふれあい祭りへの出店
8月	8月8日ロードボランティア サマーフェスティバルin Yokohama
9月	『よこせとまちづくりニュース』発行 浦戸湾海洋調査「 ニロギ釣り 」開催
10月	南嶺ハイキング 運動会
11月	横浜小学校自然学習林清掃活動 ロードボランティア
12月	忘年会
3月	歴史探訪まちあるき ロードボランティア

表2に示しているのが、よこせと地域の平成27年度の活動実績である。赤字で記している活動が、よこせと連携協議会の活性化部会のにぎわいの分野で行われている地域イベントであり、よこせと地域では、年間を通じて地域イベントを開催していることが分かる。よこせと海辺のにぎわい市を始めとするお祭りの地域イベントから、自然を活かしたハイキング、浦戸湾の海洋調査を兼ね、地域住民のアイデアから生まれたニロギ釣りのイベント等、多様な地域イベントを開催している。また、年二回「よこせとまちづくりニュース」(図5参照)という広報誌や、よこせと連携協議会所属団体の各種行事が一目で分かる地区の行事カレンダーも発行し、地域の情報発信の役割も担っている。



図5 よこせとまちづくりニュース

3.3. 地域イベント「よこせと海辺のにぎわい市」の概要

よこせと地域のメインイベントとなっているのが、毎年5月中旬に開催されている「よこせと海辺のにぎわい市」である。2019年度で18回目の開催であり、以前は栄えていた灘漁港に不法投棄が増え、人が立ち寄りなくなってしまったことから、にぎわいと環境美化を目的に開催されている。開催を始めた当初は行政主導で始まった地域イベントである。そのため、毎年祝辞には開催時に計画に携わった高知市副市長も訪れ、高知市からも厚いバックアップを受け開催されているイベントであることが伺える。灘漁港を会場に、魚介類の解体販売や徳島県上勝町のしいたけや地域農家の農産物、横浜中学校生徒会による出店も見られる。また、消防署の消火体験や地域団体による送迎バスの運行等、地域からの厚い協力体制が整っている。来場者は年々増加し、住民約8000人のよこせと地域に約5000人が来場する。このイベントでの収益はよこせと地域の他のイベントの資金源ともなっており、地域住民にとっても、よこせと地域の地域づくりにとっても欠かせないイベントとなっている。



図6 2019年度よこせと海辺のにぎわい市の様子

4. 考察

4.1. よこせと連携協議会の活動による地域への影響

4.1.1. 地域づくりでの意識

よこせと地域では、以前地区ごとに9チームほどのソフトボールチームが存在しており、横浜小学校で100人規模のソフトボール大会が行われていた。そこで現よこせと連携協議会会長の江口さんや横浜体育会の丸岡さんらを始めとする地域でのコミュニティが生まれた。そしてそのコミュニティを引き継いだ体育会のメンバーがよこせと連携協議会で今も活動をしている。そのため、行政主導という形で出来た団体ではあるが、元々地域のために、人のために集まったという意識ではなく、同じ地域の仲間同士だから集まったという意識が強い。したがって、一般的にあまり役を任されることを望まない人が多いとされる地域づくりにおいても、義務的・業務的に感じている人は少なく、地域のことにおける当事者意識が強く、意欲的で活発な活動へと繋がっている。一方で、主体的に参加していない地域住民は、当事者意識が薄く、地域づくりの活動に必要性を感じない、理解されづらい一面を感じることもあると分かった。

4.1.2. イベントの変化

【イベントスタート時】

- ・行政主導で地域住民は受け身
- ・会議からの発案
- ・参加者の多くが地域の住民

【現在】

- ・住民主体の地域イベントづくり
- ・住民からの柔軟なアイデアにより地域イベントが多様化
- ・地域外からもよこせと地域のイベントに参加する人が増えた
- ・参加団体同士の連携が出来、地域での協力体制構築

スタート時と大きく異なるのは、住民が主体となって地域づくりを行っている点である。それにより、アイデアの幅が広がり、住民ならではのつながりにより地域外からの参加者を招くことに成功している。また、「楽しむこと」をモットーに地域づくりを行っているため、地域イベントの場における雰囲気が非常に明るく、団体同士の連携がとれていることも地域イベントを行っている中での変化として挙げられる。

4.1.3. 組織内の関係性

よこせと連携協議会内の関係性を表す特徴として3点挙げられる。1点目に、4つある部会の中の3つの部会長が女性であり、その内一人は地域外に住む女性であることが挙げられる。よこせと・まちづくり市民会議であった頃には、部会制ではなく単一組織であり、負担や決定権がリーダーに集中している欠点があった。それらを打開するために部会制が取り入れられた。それまで、リーダーシップを取っていたのは多くが男性であったが、よこせと地域では、PTAを経験して地域づくりへ参加する人が多くいることもあり、女性が活躍することが歓迎され、また当たり前の風潮であったことから部会長の半数以上を女性が担う体制が実現している。

2点目に、早いうちから若い人に仕事を任せていることが挙げられる。よこせと連携協議会は、縦関係のしがらみが少なく、フラットに意見が言いやすい雰囲気がある。そういった雰囲気を作っているのは、会長を務めている江口さんから古参のメンバーが、意識的に若い人に仕事を任せ、口出しをせずに見守ることを徹底しているからであろう。それにより、若い内から地域での責任感を持つようになり、地域愛を育み、若い世代の定着にも繋がっていると考えられる。

3点目に、月一回以上の親睦会を行っていることが挙げられる。これにより、地域の情報を常に共有することができる。また、ニロギ釣りや、サマーフェスティバル等のイベントのアイ

アがこの親睦会で生まれており、アイデアが生まれる場所としての機能も果たしている。

これらの特徴を踏まえ、まず、よこせと地域において柔軟な考えを持つリーダーがいることの意義は大変大きいと考えられる。老若男女、地域も関係なく活躍することができる環境を地域にもたらしているのは、新しく入ってきた人ともすぐに信頼関係を築き、責任ある仕事を託し、指示するだけでなく同じ立場で地域に働きかけてきた会長の江口さんがリーダーであることが大きいだろう。このように、責任を持たせつつ計画段階で内容を随時チェックできるこの体制は、高齢化により引き継ぎが困難になる事態も招きづらくなると考えられる。次に、イベント企画立案段階で、企画担当が地域を超えて集まり、人材不足の心配が他の地域に比べて少なく、コミュニケーションが日常的にとれているため、イベントなどのアイデアが生まれた際、それを形にするまでのスピードが速い。このコミュニケーション重視の姿勢を地域づくりの際に最も重要視していることが、よこせと協議会が地域に受け入れられている一つの要因ではないかと考えられる。

4.1.4. 地域への影響

【物理的变化】

- ・灘漁港に JF の直販所



図 10 灘漁港直販所(海の魚心市)

- ・イベントの成長⇒海辺のにぎわい市：約5,000人

サマーフェスティバル：約1000人

海辺のにぎわい市を開催するようになり、不法投棄が問題視されていた灘漁港が整備され、注目され始めた。それにより、JFが灘漁港に直販所「海の魚心市」を開設した。地域に近隣する御量瀬地区を始め、高知県下の市場で水揚げされた水産物を数多く取り扱っており、よこせと地域における魚食の普及と水産物の消費

拡大にも繋がると考えられる。

にぎわい市は5000人、横浜小学校で毎年8月に行われる夏祭りでは、1000人の人が来場するなど、地域イベントの成長と直販所の設置という地域イベントによる物理的変化がよこせと地域への新たな人の流れを創出することに貢献している。

【意識的な変化】

- ・ イベントを通じた人との繋がり⇒日常的なコミュニケーション
- ・ 地域への関心を高める
- ・ 防災意識向上

年間を通じて地域イベントを開催することにより、地域住民の間であいさつや日常的なコミュニケーションが生まれている。また、よこせと地域では、今後南海地震が起こった際に津波の被害が予測されていることから、地域イベントの中で避難訓練やフィールドワークを通じ地域の防災マップを作るイベントも開催されている。地域住民の関心が高い防災分野の地域イベントを開催することにより、お祭りには参加しない層の住民や地元企業も身近な問題としてイベントに参加しやすいため、防災への意識を高めることにもつながり、地域の防災力を高めることにも役立っている。この結果、このイベントを通して、よこせと連携協議会と地域住民・企業との関係性が生じている。こうした住民参加型の地域イベントを通じた地域でのコミュニティ創出は、地域への関心を高め、地域愛を増幅させると考えられる。地域住民からは、「日常的にコミュニケーションをとる地域の仲間がいることで、よこせと地域での暮らしがより安心で楽しいものになった。自然災害が起こった際にも三軒両隣助け合う精神がよこせと地域には残っている。」という声もあり、防災関連のイベントを行うことによって住民から見た地域の価値が高まっていると考えられる。

よこせと地域において、地域イベントの影響が良い影響を与えた要因として、住民視点のアイデアを生かした地域イベントを地域づくりに取り入れていることが挙げられる。よこせと地域では、よこせと連携協議会以前の行政主導の時代から、地域住民が地域づくりに参加していたことで、住民視点でのアイデアを生かした地域イベントづくりが行われてきた。そのため、住民視点で関心を惹きやすい海辺のにぎわい市やサマーフェスティバルを始めとするお祭り分野と防災訓練や防災マップ作りといった防災分野の地域イベン

トが充実している。住民の関心を惹く地域イベントは地域への影響を与えやすいだけでなく、住民にも受け入れられやすいと推測される。

4.2. よこせと連携協議会の活動による地域への影響

①変化に寛容で、老若男女地域内外関係なく活躍できる雰囲気地域全体に形成されている

よこせと地域は、リーダーシップを取る層が、若手への権限委譲や地域外からの参入などの変化に寛容であり、それにより老若男女、地域内外を問わず中心となり活躍できる雰囲気が形成されている。若い世代の地域づくりへの参加が減少している中、自主的に楽しみながら地域づくりに参加したいと人が集う点は、よこせと地域の評価すべき点の1つであると考えられる。

②地域づくりの定義「主体形成＝対話を重ねる仲間づくり」を地域イベントの開催を通じ達成している

既往文献より地域づくりの定義として置いた「主体形成＝対話を重ねる仲間づくり」においても、よこせと地域では、地域づくりの主体であるよこせと連携協議会の会員同士が対話を重ねる場として、会議に加え月一回以上の親睦会が自主的に設けられており、よこせと協議会の他部会だけでなく、外部の新たな参画者など多様な声をイベント形成に取り入れている。この風土がよこせと地域での地域づくりが効果的に機能していると推測される。

4.3. よこせと地域の課題とその対策

これまで述べてきたように、よこせと協議会の取り組みは地域に新たな価値を創造した。しかし、この活動を維持継続していくためには少なからず課題も存在する。

① 主体となる人が固定化⇒地域づくりがマンネリ化

よこせと連携協議会を中心とした地域づくりは、どうしても主体となる人が固定化してしまい、それにより地域づくりや地域イベントがマンネリ化してしまっている。中でも海辺のにぎわい市等、恒例となっている地域イベントでは、毎年来場者も増え成功を収めていることから毎年同じことを繰り返してしまっており、主体であるよこせと連携協議会の方もマンネリ化を感じているようであった。

② よこせと地域の情報発信が不十分

よこせと地域では、地域の情報を発信するため、「よこせとま

ちづくりニュース」や行事カレンダーの発行を行っている。だが、地域外の人に対しての情報発信が必要な地域イベントの情報や、地域の住民が必要な時にすぐ見られる情報提示は充分ではない。よこせと連携協議会のホームページは設置されているものの、あまり活用されておらず、情報発信の一つの手段としての機能は果たせていないと考えられる。

③ 当事者意識を住民全体に広げていく

よこせと地域で主体となり地域づくりを行っていたり、地域イベントに参加する地域住民は地域への関心が高く、地域への当事者意識も高くなっている。だが、一方でそのどちらにも該当しない地域住民は当事者意識が希薄であり、地域づくりの活動を理解しづらく、地域のコミュニティにも参加していない現状がある。そこで、上記3点の課題に対して以下の通り解決策を提案する。

・地域の小中学生のアイデアを地域づくりに取り入れる

よこせと地域の地域イベントに積極的に参加しており、よこせと地域の地域づくりに深いつながりのある横浜小学校・横浜中学校の生徒の意見を聞き、その中で出た要望やアイデアを地域イベントに取り入れる。改善点①で挙げた地域イベントのマンネリを解消すると共に、改善点③で挙げた当事者意識を若い世代から浸透させることで地域愛を育み、地域に若い世代を定着させることにもつながると考える。

・インターネット（HP・SNS）を活用した情報発信

現在、よこせと地域の情報発信は、広報誌をはじめとする紙媒体が中心となっている。だが、広報誌は必要な時に情報を見つけづらく、保存も難しい。地域内外へ向けた地域イベントのPRと共に、よこせと地域での防災や福祉分野等の、地域で必要とされる情報をまとめてインターネットで効率的に発信することで、地域イベントの認知向上と地域住民への理解を深める。インターネットを活用した情報発信を進めることで、地域の情報を隔たりなく発信することができ、住民が地域の価値を再発見する機会創出にもつながると考えられる。こうした新しい形での情報発信により、改善点②で挙げた情報発信の不十分さを補完する。改善点③で挙げた地域イベントに参加していない地域住民にも、インターネットを通じ地域のことを知ってもらうことで、地域への理解と当事者意識を高めてもらうことができるのではないかと。

今後、地域住民の更なる理解と地域イベントの向上を図ることで、住民に当事者意識を持たせる。よこせと地域と住民が地域づくりの場を介し、関わり合いながら成長を続けていくことで、よこせと地域の住民がスローガンとする「元気、楽しく、喜ぶ」地域のあり方が今後も実現されるのではないだろうか。

5. 本研究のまとめ

地域イベントを用いた地域づくりを実施したことによるよこせと地域への波及効果として、次の三点が挙げられる。

1. 地域づくり＝主体形成を達成
2. 地域への新たな人の流れを創出
3. 地域住民同士のコミュニケーション

よこせと連携協議会での部会制を用い、地域イベントを中心とした地域づくりのあり方は、人口減少、少子高齢化が進む地方の地域づくりにおいて先進的であると言えるだろう。しかし、よこせと地域の課題として以下のことが示された。

- ・主体となる人が固定化している
- ・地域の情報発信が不十分である
- ・住民間での当事者意識に差がある

地域活性の波及効果を持続させるためには、地域での活動を維持継続していくことが必要不可欠であり、地域住民と地域づくりの主体側が相互理解を深め、発展していくことが求められる。その対策として、若い人のアイデアや新しい手法を用いることを提案したい。例えば、

- ・地域の小・中学生のアイデアを地域づくりに取り入れる
 - ・インターネット（HP・SNS）を活用した情報発信
- などを取り入れることで、課題に対する対策とする。よこせと地域での事例から、今後課題に対する対策は必要となってくるが、楽しみながら地域と住民が地域づくりの場で関わり合い、成長を続けていく地域のあり方をもたらし手法として、地域イベントを用いた地域づくりは有効であると言えるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 1) 石井大一郎／霜浦森平. はじめての地域づくり実践講座. 初版. 東京. 北樹出版. 2018. 198p
- 2) よこせと地域連携協議会ホームページ

<https://yokoseto.amebaownd.com/> (最終閲覧日：令和2年1月

15日)

3) 地域内連携協議会—高知市公式ホームページ

<https://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/21/kyougikai.html>

(最終閲覧日：令和2年1月15日)

4) 横浜瀬戸コミュニティ計画

<https://www.city.kochi.kochi.jp/uploaded/attachment/3004.pdf>

(最終閲覧日：令和2年1月15日)

5) 中西穂高「地域経済の衰退にともなう地域イベントの変容：産
炭地北海道歌志内市の事例」2005年

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jace1998/4/3/4_3_77/_p](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jace1998/4/3/4_3_77/_pdf/-char/en)

[df/-char/en](#) (最終閲覧日：令和2年1月15日)